

地方独立行政法人  
神奈川県立病院機構  
神奈川県立  
がんセンター

末梢カテーテルや中心静脈カテーテル挿入部に貼付される透明フィルムドレッシング材は、観察のしやすさや固定性、水蒸気透過性に加え、簡単な操作性も求められている。神奈川県立がんセンターでは、簡単に貼付できて手技を標準化しやすい透明フィルムドレッシング材を導入した。その効果などについて紹介する。

## 手技を標準化しやすいドレッシング材を導入し カテーテル挿入部のスキントラブルに対応

神奈川県立がんセンターでは、新しい透明フィルムドレッシング材を導入した。導入した透明フィルムドレッシング材は、テルモのReal Safety\*というコンセプトのラインナップの1つであるロイコメドドレッシング。

医療安全推進室褥瘡管理者で皮膚・排泄ケア認定看護師の関宣明さんは、「水蒸気透過性がいいことと、簡単に貼ることができるということで導入前に試してみました。中心静脈カテーテル挿入部に貼付することが多い血液内科病棟と、末梢カテーテルの使用頻度が高い消化器外科病棟などで使ってみました。スキンケアリンクナースの調査でも皮膚トラブルなどの問題もとくになく、従来のものに比べて操作が簡単だという意見が多かったので導入にふみきました。とくに、支持フィルムをはがすとき赤タブが使いやすく、フィルムがつかれてはがれることも

ない、フィルムをはがすときも皮膚への刺激が少なくはがしやすいという感想が印象に残っています」と言う。

また、ロイコメドは末梢カテーテル固定用、中心静脈カテーテル固定用、創傷保護用等さまざまなサイズのものがあるが、全品種とも同じ手順で簡単に貼ることができるため、手技を標準化しやすいというメリットもある。導入後は大きなトラブルもなく、手技の標準化による業務負担の軽減につながっているという。

### 中心静脈カテーテル挿入部の スキントラブル予防について検討

同センターの血液内科病棟では以前、中心静脈カテーテル挿入部のスキントラブルが頻発していたという。そこで、皮膚・排泄ケア認定看護師の関さんと血液内科病棟のスタッフが共同で、スキントラブルを予防するための研究を行った。

「造血細胞移植をする患者さんなので、抗がん薬、全身照射、移植片対宿主病によって皮膚が脆弱化する方が多かったです。中心静脈カテーテル挿入部のスキントラブルによって苦痛を訴える人も多かったので、挿入部に貼付したドレッシング材の機械的刺激が原因ではないかと

思ったのです」と関さんは言う。

そこで関さんたちは、造血細胞移植患者の中心静脈カテーテル挿入部のケアに、皮膚保湿・清浄クリームと非アルコール性皮膜剤を使用。その手順は、週1回のドレッシング交換時に、①カテーテル周囲2cmを除き、皮膚保湿・清浄クリームを用いて清拭する、②ポビドンヨードにより挿入部を消毒する、③カテーテル周囲2cmを除き、非アルコール性皮膜剤を塗布する、④透明フィルムドレッシング材を貼付する、というものである。

「皮膚保湿・清浄クリームと非アルコール性皮膜剤を使用しない従来のケアと比較してみました。比較したのは、①皮疹と疼痛の有症状者数、②皮疹と疼痛の有症延べ日数、③血流感染発症件数(血液培養陽性例)です。その結果、皮疹の比較では清浄・皮膜ケア群の発症は従来ケア群に比較し有意に少なかったのです。また、血液培養陽性者数に差はありませんでした」と関さん(この研究は第31回日本造血細胞移植学会総会で発表された、資料1)。

この研究結果を受け、血液内科病棟では皮膚保湿・清浄クリームと非アルコール性皮膜剤を使用する手順を標準化しているという(資料2)。

「このケアでのポイントは、ポビドンヨ



「中心静脈カテーテル挿入部のスキントラブルを予防するため、ドレッシング交換時のケアについて検討しました」と話す皮膚・排泄ケア認定看護師の関宣明さん

\*Real Safety「安全を、もっと楽に、簡単に。」:医療従事者の業務負担を軽減しながらいままでも以上の安全を実現するため、慣れやコツ、人頼みを必要とせず、誰でも簡単に確実に安全が機能するをコンセプトに開発された製品やサービスに付けられる総称

## 資料1 研究の概要

### ①研究目的

造血細胞移植(以下、HCT)患者の中心静脈カテーテル(以下、CVC)挿入部のケアに、皮膚保湿・清浄クリームと非アルコール性皮膜剤を用いて、スキントラブルの予防効果を明らかにする。

### ②研究方法

- ①研究デザイン：準実験研究
- ②研究対象：造血移植病棟に入院中のHCT患者
  - ・介入群(清浄・皮膜ケア群)：2008年2月～10月に研究同意を得た患者15名
  - ・対照群(従来ケア群)／2006年1月～2008年1月の患者30名
- ③データ分析：以下の点について2群の差を検定
  - ・皮疹と疼痛の有症状者数
  - ・皮疹と疼痛の有症延べ日数
  - ・血流感染発生件数(血液培養陽性例)

### ③結果

- ①清浄・皮膜ケア群は従来ケア群に比較し、皮疹と疼痛の人数と日数に差があった。
- ②血流感染は差がなかった。
- ③清浄・皮膜ケア群の皮膚乾燥は60%、瘙痒感は73.3%にあった。

### ④まとめ

- ①清浄・皮膜ケア群の皮疹発症は有意に少なかった。非アルコール性皮膜剤を使用したことが皮疹の予防につながった。
- ②清浄・皮膜ケア群の半数以上の人に乾燥・瘙痒感があった。CVC挿入部の乾燥へのケアが望まれる。
- ③血液培養陽性者数に2群の差はなく、清浄・皮膜ケアの感染への影響はなかった。

吉田奈穂ほか：造血細胞移植患者における中心静脈カテーテル挿入部の皮膚ケア——皮膚保湿・清浄クリームと非アルコール性皮膜剤を使用したスキントラブル予防の検討。第31回日本造血細胞移植学会総会，2009。

ードを自然に乾燥させてから皮膜剤を塗布し、透明フィルムドレッシング材を貼付することです。すこしケアの時間がかかるというデメリットもありますが、そうすることでスキントラブルを防止することができます。当初は、感染が心配だという医師も多かったのですが、血液培養陽性者数に差がなかったことで払拭されました」と関さん。

今後は、血液内科病棟以外でもこの手順を標準化したいという。

### 透明フィルムドレッシング材貼付部の皮膚の伸展によるスキントラブルの防止

一方、中心静脈カテーテル挿入部への透明フィルムドレッシング材の貼付方法は全病棟で統一している。

「枕をはずし、貼付部位を伸展させた状態でドレッシング材を貼付するように徹底しています。伸展させないで貼付すると、伸展したときにドレッシング材で皮膚が引っ張られてしまい、その刺激がスキントラブルの原因になってしまうから

## ●ロイコメド ドレッシングによる中心静脈カテーテル固定方法

テルモ(株)資料より



①両手で剥離紙を少しはがす



②両端を持ちながら、ドレッシングの中心をカテーテル刺入部にあわせて貼付する



③大きい剥離紙、次に小さい剥離紙を片方ずつゆっくりはがし、カテーテル両脇に密着させ、さらに全面を皮膚に密着させる



④赤いタブを持ち、支持フィルムをはがす



⑤カテーテルに沿ってドレッシングを密着させる



⑥剥離紙についている固定テープでカテーテルを固定する

## 資料2 血液内科病棟の中心静脈カテーテル挿入部の管理手順

### CV包交

長期にわたりCV管理が必要で、感染・出血のリスクが高い患者が多いため、異常の早期発見・対応を目的とし、包交を行う。

#### 1. 包交日

- ①週1回、火曜日
- ②パット付きのロイコメドを使用している場合や、ガーゼ保護の場合、毎日包交を行う。出血や発汗がない場合には1日おきでもよい。
- ③発赤・腫脹・出血・疼痛などの異常や、ロイコメドがはがれている場合には、適宜包交を行う。

#### 2. 物品

院内基準(看護技術1)に順ずる

- ①移植患者(無菌化開始～生着確認まで)やテープかぶれがある場合には、皮膚保湿・清浄クリームと拭き取りのための滅菌ガーゼ2枚、非アルコール性皮膜剤を準備する。

※移植患者は、大量化学療法や放射線照射によって、通常の治療よりも皮膚への障害が強い。また強力な骨髄抑制から表皮の常在菌に対する抵抗力も弱く、さらに低栄養傾向にある。微小な皮膚の損傷であっても致命的となり、患者のQOLを著しく低下させるおそれがあるため、皮膚保湿・清浄クリームや非アルコール性皮膜剤を使用する。

#### 3. 方法

院内基準(看護技術1)に順ずる

- ①皮膚保湿・清浄クリームはロイコメドをはがしたあと、ポビドンヨード消毒前に使用する。滅菌ガーゼに皮膚保湿・清浄クリームを適量つけ、CV挿入部周囲直径2cm以内に触れずに内側から外側に向かって皮膚を清拭する。新たな滅菌ガーゼで、皮膚保湿・清浄クリームが皮膚に残らないよう完全に拭き取る。
- ②非アルコール性皮膜剤は消毒後、ロイコメドを貼る前に使用する。ポビドンヨード消毒後、挿入部より直径2cm以内に触れないように内側から外側に向かい皮膜剤を塗布し、ロイコメド貼付範囲内に皮膜を作る。
- ③乾燥(約1分程度)を待って、首を伸展させてロイコメドで固定する。
- ④ロイコメドをはがしたあと、ポビドンヨード消毒の前に手袋を交換し手指消毒を行う。



新人教育に取り入れているロイコメドの貼り方。「患者さんには枕をはずしてもらい、皮膚を伸展する」と明記している



2013年11月に新病院がオープンした神奈川県立がんセンター。2015年には重粒子線治療施設も設置される予定

です。とくに、抗がん薬のポートが挿入されている患者さんの場合、ドレッシング材を貼付したまま在宅で3日間くらい過ごすことになります。患者さんはその間いろんな動作をするはずですから、貼付部位も伸びたり縮んだりします。ですから、できるだけ伸展した状態でドレッシング材を貼付することで、引っ張られる刺激を少なくしています」

同センターでは、この予防的スキンケアを全病棟で実施するため、新人教育のプログラム「感染予防と創傷管理」のなかの「CV周囲の皮膚のケアとテープ固定」

に明記している。

「観察のポイントや消毒方法、手指衛生などと一緒に、感染管理認定看護師が担当しています。新人教育では演習も行い、ベーシックな教育として力を入れています」

末梢カテーテルの場合も、抗がん薬の漏れを防ぐための固定方法などを新人教育に取り入れているという。ロイコメドは操作が簡単で手技を標準化しやすいという点から、教育のしやすさにもつながっている。

最後に関さんは、「今後は、血液内科病

棟で実施している皮膚保湿・清浄クリームと非アルコール性皮膜剤を使用したスキンケアを、全病棟で標準化したいと思います」と今後の展望を語ってくれた。



2013年11月に新病院をオープンした神奈川県立がんセンター。さらに、患者の安全・安楽のための取り組みを充実させている。なお、同センターが導入したロイコメドを販売するテルモでは、医療機器の適正使用をはかるため、医療機関の要望に応じてアレンジ可能なT-PAS研修\*\*の提案、実施を行っている。

\*\* T-PAS研修：シリンジや輸液セットといった汎用医療機器などによる事故を防ぐために、添付文書に記載された注意事項のうち、発生する頻度や危険度が高いものを体験して理解する教育プログラム。詳細については、テルモ株式会社にお問い合わせください